

を口で割ると柔い白い身がある。これを取り出して酢醤油にちよつとつけて口に運ぶ。この動作を夢中になつて繰返している姿を誰かがカメラにおさめている。これは後々までの思い出として夫々のアルバムの1ページを飾ることになる。網走湖に夕焼けが美しく映えて湖水は一面に紫色に変つて見えた。この風景と夕暮れの空気を故郷の両親に恋人に送つてあげたいなあ……心の中でそう思つた人は数多かつたであろう。その赤くそまつた西の空は私達に“明日も又よい天気をプレゼントしてあげましょう”と語りかけているようで……………。

網走から京都まで

短食二回生

日はすでに登り湖の上にキラキラ輝いていた。私達は朝食のキャベツのサラダと魚の罐詰をお腹一杯食べ湖へ行つた。私達を誘う様に湖は美しかつた。思わずボートに乗りバスが発する時間まで戯れていた。網走まで来てボート遊びをするとは想像もしていなかつた。バスの中でお互いの手の豆を見せ合うのも楽しいものである。9時頃バスは一夜の宿である湖を去り原生花園に向う。一面の草原の向う側にはオホーツクの海が静かであつた。群れなしあるいは散々倍々と牛馬が戯むれている姿は全く絵の中に溶け込んだ絵具の後の様である。中華料理に用いる岩ツバメの巣を見た。一瞬かぐや姫を思い出した。やがてバスは広々とした原生花園に着いた。紅色の花が一面に咲いている。“はまなす”このはまなすの花の背後に遠く知床半島がかすんでいた。海岸に降りた。オホーツクの水は想像していた様に冷たくなかつた。この穏やかな海に流氷が出来るとは思えない。土産にオホーツクの貝殻を拾つた。再び私達は車中の人となつた。海岸線に沿つて素晴らしいドライブを続け天都山に着いた。天都山からは能取湖と網走湖が見える。海か湖か判らぬ位である。その美しい湖の裾に少しばかりの部落がある。まるで砂漠の中の隊商の様に私達は湖から湖へとラクダならぬバスを走らせバスストップでは冷たいミルクをゴクンと口に含めた。

バスは天都山を下り呼人を過ぎて美幌の町に着いた。こゝで昼食を取る。ある部屋に通され早速御飯にしようとした。目の前には昨夜食べた毛ガニが大手を上げて横たわつていた。昼間からサービスがいいなあーと思ひ舌なめずりをしたとたん、他の団体が入つて来た。

それは私達ではなくその人達の物だつた。私達は別の室でかにめしを食べた。これの方が穀を取る手間が省けて上等であるとも考えられる。昼食の後しばらく散歩に出かけた。私は美幌駅の方へ足を進めた。北海の駅も内地と同じ様に若人とリュックで満ちていた。「君の名は」の映画で想像していたのと違い少し失望した。バスに帰ると友達が桜んぼを買って待っていた。ここではまだ莓や桜んぼが八百屋の前を賑わしていた。この桜んぼを次から次へと口の中へ入れる。こんなに美味しい桜んぼは美幌ならではの思い出である。この桜んぼの色。そして上を見る。内地で言う秋晴れの空。美しい雲のクツシヨン。それに比べ昨日の憎らしい空。ひどい霧。大望の摩周湖が見えなかつた事。もう一度引き返して見たくなる。複雑な気持のまま今日の目的地層雲峡へと一路進む。行路は大部分がバスの中、広々としたジャガイモ畑を一直線に進むのは何とも言えない気持である。反物を広げた様に緑の深いものや小麦色に広がる道。やっぱり北海道だなあーと感心させられる。石狩川に沿ってバスが進む。歌に唱われた様に美しい清水が岩にぶつかりながら急いで流れている。蛇行の川である丈にくねくねと曲っている姿は面白く見える。谷間の様に大木や岩壁が左右に見え情緒深い路である。四時頃に大函小函に着く。そしてそこにそそり立つ岩壁は自然の雄大さと恐ろしさを感じさせる。岩肌が刃の様に切れている。記念撮影をする。大函を過ると層雲峡である。トンネルの中を通り脱けると温泉町の層雲峡に到着。温泉町と言つてもとても静かな町である。アイヌ人が経営している民芸品店があつた。今日は早く旅館に着いたので皆今迄の労を充分いやしている様であつた。一夜の宿を取る事によりすがすがしい朝を迎えて、又今日一日の旅程が楽しくあります様にと願う私達である。石狩川上流深く北海道オ一の溪谷美を誇る層雲峡、そこは誠に断崖絶壁、人工を入れざる大処女林の美。造化の神秘を秘めた複雑な大溪谷である。原始林と巨岩の間に落ちる幾筋の滝は私達を神秘の境地へと誘い込む。私達は特に美しいと思われる銀河の滝をバックに又記念撮影を取つた。その後絶壁や大岩崖が覆いかぶさる下を買けまさに函底にあるが如き道を数分間進んだ頃眼前には広々と横たわる清滝が開け、今迄の息詰る様な気持が一勢に吹き飛ぶ。そして何故か自分の元来の世界に帰つた気持にひたるのだつた。この清流こそ美化され親しまれている石狩川である。この川への待望は誰れしも興味深く待ちこがれていた事であろう。その期待を十分に満足させてくれたと言つても過言ではない。この流れをたどりながら旭川に至つた。旭川観光ホテルで昼食を取る。二回続いた“親子丼”から変り“カレーライス”だつたのに嬉しく思つた。旭川駅から汽車で札幌に向う。我先きにと格好かまわず争い取つた席に気持を落ち着かせ、車窓から見る景色は素晴らしいも

のであつた。実に広々として落ち着いた緑色の一面は平和そのものの様な気がする。七時頃札幌に着いた。一行は北海道旅行始まって以来街らしき街に出合わして愛着を感じた。この日は円山公園のユースホステルに直行、夕食後自由に街を散歩した。

札幌と言えは北大、そしてポプラ並木である。天までとどく様なポプラ並木の中に立つてずーと梢の方を見ると日光がポプラの一葉一葉にキラキラ光る様にさしている。そして自分はポプラに包まれてどこまでも一人で歩いて行く。と言つた夢を描いていたのだが「こちらがかの有名なポプラ並木でございます。」と案内された時私はどこに？まだ外にあるのではないかしらと思つた位である。余りにも私の夢が大きすぎた事を感じずには居れなかつた。ポプラ並木と名のつく中は観光客でごつたがえしていた。又その中で私は悲しく又寂しい気持ちにさえなつたのだつた。でもこの様な私の重い気分も羊ヶ丘に着くやいなやたちまちに消え去つた。風になびくふさふさとした緑のじゆうたん。草の隙間にちらほらと羊が見える羊ヶ丘を私は素足で走り出したくなつた。名は知らないが小さな花々が私の足の廻りに一杯咲き乱れていたのを今も眼前に見るのだ。

ここで撮つた写真は皆のびのびとほほえみ、そよ風や草や花と戯れている様だ。この私の大好きな月寒とも別れを告げてバスは支笏湖へと進んで行く。エクボの多いこの北海の道をガタガタのバスに透られて外を見ても窓は埃りだらけ。今日は天気なのか曇りなのか首をかしげて見るのを止め友達とベチャクチャと雀の合唱です。支笏湖に着いた時は空もどんよりしていた。しかし今迄見た湖では一番汚れていたのが残念であつた。折角ここまで来たのだから一ヶ所でも多く雄大な自然の姿を見られる様にと探究したけれど時間の都合で余り良く見られなかつた。次にアイヌ部落白老でバスを降りた。そこには酋長と名乗る老人が毎日同じ事を言つて商売していた。洒落を言つて私達を笑わせ優越感を感じている日本人を喜ばせ小さな広場でアイヌ踊りを見せてもらう。奇妙な声で哀さを響かせた歌を歌つて単純に手足を動かしていた。いつかは滅びてしまう民族への同情とは別に、もつと別の生き方を見つけられないのだろうか？とかアイヌ人自身の中にはブライドがないのだろうか？人の見せものの様にしているそれが何の意味があるのか？洒落が多すぎて鼻につきすぎているのではないかと、言つた様な憤りを混えた疑問を私達各自の胸に引きおこしていた様だつた。この様に異様な感銘を受けた白老を後に私達一行は登別へと心はずむ。まだ見ぬ登別。北海道才一の温泉地だと言う。心の汚点を流すかの如く雨が降つていた。手のしびれる位重い番傘をカランコロンとリズムカルな大きな下駄と共に地獄谷に向つた。ここはもとの噴火口跡だとか…。赤茶けた岩の絶壁の中に丘が起伏し多くの気

孔から絶えず熱湯や熱気をふき出している様は、何とも言えぬ畏敬の念を示さずにはおれなかつた。やはり、はるけくも遠く迄来たものだなあーと旅情を偲んだ。この登別の湯は大変気持ちが良い肌がなんとなくしつとりとした感じですべすべする。ここに何ヶ月か過せれば多分美人に近い存在になれるだろう？と思ひながら床に入る。旅の疲れを若さで飛ばし又目をさますと次への期待と京都の街の姿が何となく偲ばれる。湯の街はこぬか雨にぬれていた。旅館の赤い緒のゲタと重い番傘を借りたのを思い出しながら昭和新山に向う。この新山は昭和18年に誕生したのだから、今年はハタチ。思わぬ所で同類を得た様な気持ちであつた。しかし生憎の雨が赤茶けた岩肌とふき上る噴煙と真夏の青空のコントラストを私達から引き離してしまつた感じがして非常に残念であつた。再びバスで洞爺湖へ。名鏡と唱われている美しい湖は陥没湖とか。右に左にやや単調な山波を眺めながら船は中島に着く。上陸早々の記念撮影もすっかり慣れたもので、誰もかも仲々美しいポーズである。ここには植物博物館があつた。残り少い北海道での時間がこんなにも皆の心を売店へとかりたてるのであろうか？、北海道最後の宿、洞爺湖ホテルに到着した時にはあふれる程の土産がしつかりと握られていた。翌27日習い覚えた数々の歌を口ずさみながら函館に向う。再び函館の町を見る。初めてこの地に着いた時「空気が冷たい」だの「美味しい」だのと感激し合つたのがつい昨日の事に思える。期待通りであつたりあるいはそれ以上、それ以下だつたり、感激したり、失望したり思い出は種々様々で尽きない。連絡船に乗つてしまふと旅がすっかり終つた様な淋しさに似た気持ちがひしひしと胸に迫る。約十日間滞在した土地への愛着心とでも言うのだろうか？ 船底では蹴散らかされている波しぶきが増えるにつれて船が次第に小さくなり、水面の影に沈んでやがて船は津軽海峡の真中に放り出されてしまつた。日も次第に暮れて行き、この分だと青森に着くのは夜中だと話し合つたものだ。

長い時間が過ぎた後“青森らしい”と誰かが叫んだ。港の色も土の色も別段変つたと言う訳ではないのにここが本州だと思うと全てその様に見えて来るので不思議だ。私達は再び車中の人となつた。北国を走るにふさわしいボロ汽車でトンネルに入るとあわてて窓を閉めなければならなかつた。それでも私達はうとうとしながら朝の来るのをさほど待ち遠しいと思う間もなく翌日の上野に着いた。

太陽がさんさんと降り注ぎうだる様に暑い！ 北国の涼しい旅は昨晚の夢だつたらうかと疑つて見る程だ。暑い最中の昼下り東京の宿に着いた。私達は解散する者、外泊する者、面会人と出かける者と様々であつた。

翌日は解散した人を除く全員が東京駅に向つた。焼けつく様な陽の光をそして煙でくすぼつたスモッグの多い都会の中を糸により編んでいる故く細々と走り東京駅に着いた。今まで東京と言えば遠く感じていたのにいつの間にか時間が経ち本当に惜しい様な気がした。急行である事が少し憎らしくもあり又京都駅に着きたいと言う気分も心の底にあると言う変な心境だつた。夜八時過京都に着く、出迎えて下さつた先生方の顔が不思議な、懐しく初めて本当に帰つたと言う安らきの気持が胸一杯に広がつて来た。数々の思い出、誘導して下さつた先生方、又両親への感謝の気持、そして多少の疲労感が入り混り整理のつかない複雑な気持のまま最後の解散があつた。今夜はぐつすり眠りこの整理は明日にしよう……そう思い乍ら私達は夫々の帰路についた。この半月に亘る長い旅行は一生私達の心の隅に思い出として美しい花を咲かせてくれるでしょう。

完